

西川祐信『絵本小倉山』と『西鶴俗つれづれ』挿絵の素材源

—「東北大学附属図書館所蔵狩野文庫マイクロ版集成」瞥見—

山 本 卓

東北大学附属図書館所蔵狩野文庫は、狩野亨吉(かのう こうきち。1865-1942)が蒐集に精魂傾けた10万8000余冊の資料からなっている。

狩野亨吉は、秋田の大館に、藩校教授の次男として出生。明治9年、東京に移り、東京大学予備門を経て、22年、東京帝国大学理科大学数学科を卒業後、24年、文科大学哲学科を卒業。明治25年、旧制四高教授、31年、旧制五高教頭、次いで同年、旧制一高校長となり、39年、京都帝国大学文科大学長。明治32年、安藤昌益の『自然真営道』の筆書体を発見、購入したことは夙に有名。明治41年、官職を辞し、以後、一介の市井人に徹するが、書画鑑定や書誌学に明るく、博学宏識の人として知られる。その人と学問のあらましは、安倍能成編『狩野亨吉遺文集』(昭33・11・1、岩波書店)を参照されたい。

このような狩野文庫のすべてをマイクロ化した「マイクロ版集成」全10門のうち、この度第2門(哲学・宗教・教育)、第3門(歴史・地理)、第4門(語学・文学)、第5門(美術・工芸・技芸)、第6門(法律・政治・経済)が関西大学図書館に収められた。本学図書館にゆかりの深い中村幸彦先生(1911-98)が「あこがれの狩野文庫」(丸善株式会社発行「マイクロ版集成」内容見本)と呼んだのも、むべなるかな。待望のマイクロ版の購入を心より歓迎したい。

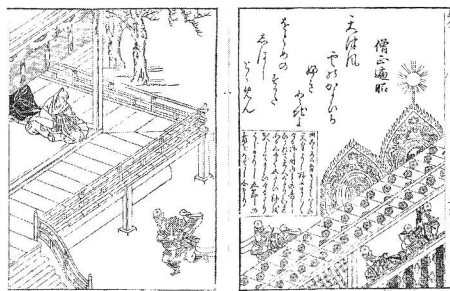
昨年春、本学図書館影印叢書第六巻として『西川祐信集』を刊行した。この時に、狩野文庫マイクロ版集成のお世話になった報告から始めたい。西川祐信は日本の絵本史においてエポックを画す京の浮世絵師で、元禄末年ごろから八文字屋本の挿絵を描きはじめ、享保八年に最初の絵本作品『百人女郎品定』を出刊し、以後絵本画家として寛延まで活躍する。その絵の大部分は当代風俗を活写するものであるが、古典作品に取材する絵本もある。百人一首に取材する『絵本小倉山』(寛延二年・京菱屋治兵衛刊)もそのひとつで、本書は百首それぞれの詠み人・歌・その歌意を記し、その歌の景を絵にしたもので

ある。

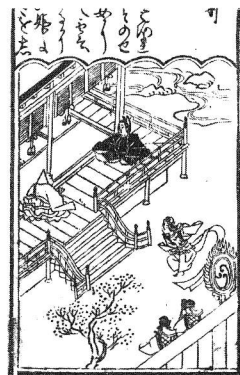
近世において古典作品がどのような形で流布していたかは、享受史の立場から重要な問

題である。古典文学研究の立場に立てば、近世の流布本は末書として低い評価しか与えられないが、近世文学研究のためには近世の人々が享受した本文によって研究をすすめるべきことはいうまでもない。当時の人々が享受した流布本とは版本であり、その多くは絵入り本である。当時の人々は実際には絵入り版本で享受

していたので、その挿絵もまた非常に重要な要素を占める。古典文学作品に取材する絵本の絵の素材源研究には、これらを精査する必要がある。ところが百人一首は近世においては甚だ広範な流布を示し、その版本はまさに汗牛充棟というべきで、これを博搜することは並大抵のことではない。ところが、狩野文庫にはそのような末書までもかなりの所蔵をみる。近世版本における百人一首絵はその大部分が歌仙絵(歌人の姿絵)であるが、少数ながら歌意絵(歌の景の絵)がある。その嚆矢は菱川師宣『百人一首像讃抄』(延宝六年・鱗形屋刊)であり、それをほぼそのまま踏襲した『百人一首基箭抄』(延宝七年・堺屋庄兵衛刊)などの系統がある。また、別系として、『伊勢物語大成』(元禄十年・吉田三郎兵衛・浅見吉兵衛・山口茂兵衛刊)に頭書として所収される「百人一首絵抄」もある。この両書ともに狩野文庫



(図版1) 絵本小倉山



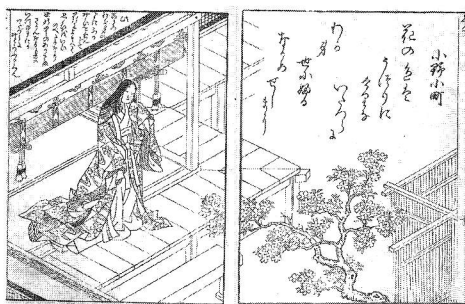
(図版2) 百人一首像讃抄

に収まっているのである。これらを詳細につきあわせてみると、祐信は『百人一首像讃抄』系あるいは「百人一首絵抄」系の絵に材を得ているところが認められる。それぞれ図版を掲げて例示すると、『絵本小倉山』の僧正遍昭の歌の絵（図版1）は『百人一首像讃抄』（図版2）を素材源とすることは対比すれば明らかであろう。他にも『百人一首像讃抄』によると思われる絵を二、三指摘し得る。「百人一首絵抄」については、一例に小野小町（図版3・4）を例として挙げると、画面右に板垣、庭の桜、左に邸の簀子縁、桜を眺めて立つ小町と構図・要素がほぼ一致する。他に絵の利用は微妙で断定しにくい場合でも、「百人一首絵抄」の歌意の注記を利用している場合がある。一例に文屋康秀を挙げる。図版5・6の両者の絵を比較すると、その利用は微妙なところでとても断定はできない。ところが、歌意の注記は「百人一首絵抄」では「此心は秋風のふくからにくさ木のしほれはてゆくにしたがひて、げにも山かぜとかきてあらしとよむもじは此ときよとをもひあはせたる也。むべとはげにもといふ心也。山風はあしきものなれば嵐といふなり。」とあり、『絵本小倉山』では「此こゝろはあき風のふくからにくさ木のしほれゆくにしたがひて、げにも山風とかきてあらしとよむもじは此時よと思ひあはせたるなり。」とある。『絵本小倉山』では末尾を割愛するものの他は殆ど全てそのまま引用していることがわかる。このように注記を合わせ見ることにより、「百人一首

絵抄」も素材源と認められよう。いまはかなり明瞭な部分を例に挙げたが、『絵本小倉山』において、「百人一首絵抄」に取材するものを他にも五、六点は指摘できる。

『百人一首像讃抄』・「百人一首絵抄」の両書は『絵本小倉山』の素材源として認められよう。作品研究において出典研究はまさにその王道的な研究であろうが、絵本の研究においては、その本文の出典ばかりでなく、絵についても素材源を明らかにしなければ、その絵師の作画法やオリジナリティーも解明できないわけで、その絵の真の面白さも論じられないこととなろう。

徒然草もまた近世のベストセラーのひとつであり、その絵入り版本も数多の異版があり、広く普及した。ところで、『西鶴俗つれづれ』（元禄八年刊）は、西鶴の遺稿第三作で、徒然草を意識した書名であることはいうまでもない。ところが、徒然草絵入り本挿絵の利用についての研究はあまり見られないようだ。管見では唯一、花田富二夫氏編『西鶴俗つれづれ』（おうふう刊）頭注はその目配りがなされているが、その指摘は『俗つれづれ』口絵（図版7）は『徒然草吟和抄』冒頭挿絵（図版8）に倣い、『俗つれづれ』卷三一三挿絵（図版9）は『吟和抄』下巻三十九段（図版10）と同場面とのものである。その指摘を確認しようとする『吟和抄』は影印本が備わらないので実見するしかないが、『国書総目録』によると、関西地区では完本は京都大学と大阪大学にし



（図版3）絵本小倉山



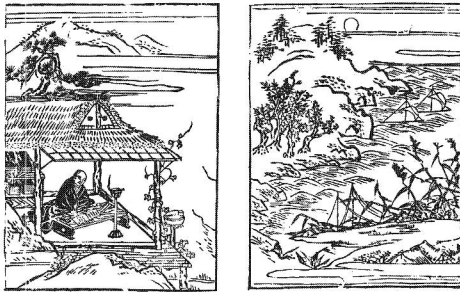
（図版5）絵本小倉山



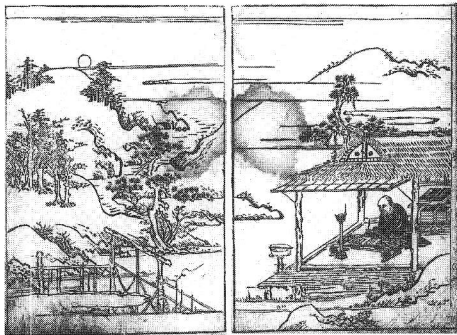
（図版4）百人一首絵抄



（図版6）百人一首絵抄



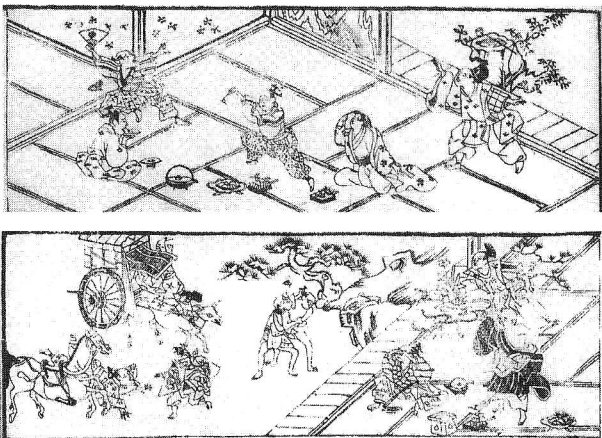
(図版7) 西鶴俗つれづれ



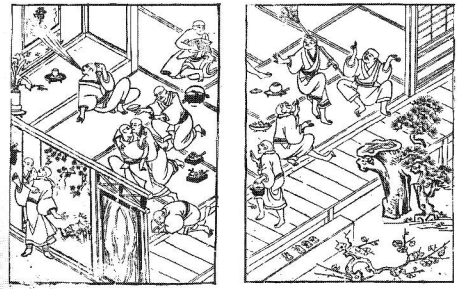
(図版8) 徒然草吟和抄

か所蔵をみない。ところが、これもまた狩野文庫に所収されている。ありがたいことである。マイクロ版によって比較すると、口絵の方はご指摘の通りであろうが、巻三三はいかがなものか、やや不安を覚えるところではないだろうか。もう少しじっくりくる種本を探してみると、『改正頭書つれづれ草絵抄』(艸田斎寸木子三徑画・元禄四年、林和泉掾刊)が見出せたので、ここに掲げてみる(図版11)。庭の手水と柄杓、間鍋や重箱、あるいは肩拔ぎの僧、酔狂に舞う僧などこちらの方が要素が似通っているようにも思うが、いかがであろうか。

浮世草子はじめ近世作品における徒然草注釈書の利用法の解明は神谷勝広氏により強力に推進されて



(図版11) 改正頭書つれづれ草絵抄



(図版9) 西鶴俗つれづれ

いるところであるが、今後はその挿絵についても研究の必要があろう。狩野文庫に収められる徒然草絵入り版本も大いに活用したいところである。

以上、この小稿では挿絵の些細な問題を報告したのみであるが、

狩野文庫の広範にして多彩な資料には稀書稀観本はもちろんのこと、従来は雑書としてあまり重視されてこなかったものの、今後は見直すべき書物も多いように思う。識者ははやくにお気づきのことであろうが、マイクロ版を購入いただいたお陰で私もようやく実感できた次第である。遅れ馳せながら、じっくりと網羅的に閲覧したいと考えている。

この度、本学図書館が購入するを得たのは、狩野文庫の全容の一半に過ぎず、残念ながらその総体には及んでいない。未購入の部門もその内容のすばらしさはいまでもない。殊に第一門(総記・雑書)は是非に必要な書物が並んでいるし、第十門(工学・兵書)の部も興味深い資料の宝庫のようである。今後、早急に他の部門を補っていただければ幸甚である。ご英断を願ってやまない。

(やまもと たかし 文学部助教授)

本文で紹介する図版は、以下の資料より転載した。

図版1, 3, 5 本学所蔵『絵本小倉山』上・中巻

図版2, 4, 6, 8, 10 本学所蔵『東北大学附属図書館 所蔵狩野文庫マイクロ版集成』

図版7, 9 大阪府立中之島図書館所蔵本を底本とする花田富二夫編『西鶴俗つれづれ』(おうふう 平成7年9月)

図版11 本学所蔵『改正頭書つれづれ草絵抄』下巻